平成最後の新嘗祭 東海村の米と粟を献穀

新嘗祭とは

新嘗祭とは、**その年の新穀をお供えし、収穫に感謝する儀式**のことで、毎年11月23日の勤労感謝の日に皇居で行われ、宮中祭祀の中で最も重要とされています。

使用する新穀は47都道府県から献穀されており、平成最後となる今年の新嘗祭の献穀は、茨城県を代表して東海村が担当。10月22日に皇居で行われた献穀式で、**市毛八郎さん**（竹瓦・JA常陸東海地区稲作生産部会 部会長）**の精米**と、**川﨑卓男さん**（照沼・JA常陸東海地区食用甘藷生産部会 副部会長）**の精粟**を奉納しました。

献穀に向けて

今年の2月、昨年献穀を行った大子町から引き継ぎを受けた東海村。5月に入ると市毛さんは「**コシヒカリ（米）**」の田植えを、川﨑さんは「**大和ウルチ（粟）**」の種まきを行い、そこから丁寧に心を込めた栽培が始まりました。猛暑や台風などの影響も心配されましたが、9月には米・粟ともに無事に収穫を終えることができました。収穫後は、関係者総動員で、精米した米と脱穀した粟の中から、よりきれいな粒を選ぶ作業を1週間かけて行いました。

献穀式に参列

心を込めて栽培・選別された米1升と粟5合を桐箱に詰め、臨んだ献穀式。当日は晴天に恵まれ、市毛さん、川﨑さんは、夫婦そろって皇居に参入し、天皇皇后両陛下にお目にかかったあと、賢所にて無事に献穀を済ませました。

【写真】市毛さんご夫婦（左）、川﨑さんご夫婦（右）

11月28日に開かれたJA常陸東海地区稲作生産部会の食味会では、献穀の報告を行うとともに、同じ圃場からとれた米と粟の試食を行い、今年の収穫に感謝しました。

【問い合わせ】農業政策課農業振興・農地保全担当（☎282-1711 内線1222）